

自律的な英語学習者(autonomous English learners) を育成するための取組の効果検証

武石 裕子 (教育実践コース)

1 問題意識と探究課題

令和1年度の実践と学校評価から、実習校（公立中学校）の生徒の英語科の家庭学習時間の少なさが明らかになった。その背景について、生徒の振り返りの分析から明らかになったのは、意欲の問題だけでなかった。学習方法が身につけておらず、何をしたらよいのか分からないためでもあることがうかがえた。また、生徒が「英語で伝わった」と感じるためには、主体的に授業に取り組み、その態度を家庭学習にも広げる支援の必要があると考察された。

令和2年度では前年度の成果、およびそこから浮かび上がった問題意識から、探究課題を「自律的な英語学習者 (Autonomous English learners) を育成するための取組の効果検証」とした。

2 英語学習における「自律的な学習者」

(1) 自律的な学習者の捉え

文部科学省は、OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030（訳注：以下、ラーニング・コンパス）の日本語版として『2030年に向けた生徒エージェンシー (Student Agency for 2030 仮訳)』を示している。そこで生徒エージェンシーの概念は次のように説明されている。「生徒が自らの学習のエージェント (agents) であるとき、つまり何をどのように学ぶかを決定することに積極的に関与するとき、生徒はより高い学習意欲を示し、学習の目標を立てるようになるでしょう。さらにこのような生徒は、生涯を通して使うことのできる『学び方』というかけがえのないスキルを身につけていくことにもなりうるでしょう。」

Autonomy (自律性) は 'capacity to control or take charge of one's learning.' であり、"Agency is often viewed as a starting-point for autonomy development." であるので、Agency を autonomy の出発点とし、agency を育成することを目指す。その agency が育成された状態を、「何をどのように学ぶかを決定すること

に積極的に関与し、より高い学習意欲を示し学習の目標を立てるようになり、学び方のスキルを身につけている状態」として実践を通して育成することを目指した。

3 1年目の実証的検討

(1) ジャンル準拠指導を用いた「評価計画の共有」実践

2年生 "NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition Let's Talk4"

① 実践した手立て

生徒が主体的に学ぶためにバックワードデザインと「学習タスク→練習タスク→評価タスク」の手順を踏んだ評価計画、プログレスカード（今年度の実践では Brush up sheet と筆者が改名）を手立てとして用いた。

② 成果と課題 (Table 1 参照)

<Table 1 成果と課題>

	成果	課題
評価計画	あらかじめ目指す姿を生徒と共有することで、生徒と教師が同じゴールに向かって学習を進めていくことができたので、ゴールを目指して学習を進めていくバックワードデザインで構成されていることが有効だった。	評価タスクにおいて即興的な会話を求めたのだからそれが生徒にうまく伝わらず、生徒に「暗記すればよい」、「完璧でなくてはいけない」と思わせしてしまった。日々の授業の中で、「どのような力を身につけてほしいか」を生徒に伝え、それらを身に付けることができるような単元を構成することである。そして「今日の授業では何ができるように」といかに意識させる必要がある
プログレスカード	生徒が本単元で目指す内容と自分と理解の程度の認識が明らかになったことである。	単元終了時に全体を振り返る時間を取ることができなかったため、最終的にどのような力を身に付けることができたか、またこれからの「主体的に学習に取り組む態度」の評価につながるような実容を見ることができなかった。

学習機器としてペアに一台ずつボイスレコーダーの使用を促したことも効果的であった。ボイスレコーダーの利用は客観的に自分の会話を振り返ることにつながった。生徒の振り返りから、話すことへの意欲の高まりを確認することができた。

(2) 生徒が「伝わった」と感じる英語授業のUDL実践

1年生 Lesson8 "School Life in the USA"

① 実践した手立て

単元全体をバックワードデザインで構成するとともに、授業のユニバーサルデザイン（以下、UDL と訳す）化を手立てとして用いた。具体的なUDLの手立てはアメリカのCAST (Center for Applied Special Technology) が設定した

「UDL 実践者の成長のルーブリック」を参考にして、次の5つとした。1つ目は「選択の重視」、2つ目は「余白の活動（授業前に洋楽BGMを流し、前時の望ましい振り返りをモニターに映し出しておく）」、3つ目は「個人目標の設定」、4つ目は「リアルな場面設定」、5つ目は「振り返りの充実とフィードバック」である。

② 成果と課題

単元を通して取り組み、有効だった手立てと有効ではなかったもの、そして有効だがそのためには改善が必要なものが明らかになった(Table 2)。

<Table 2 成果と課題>

	有効だったこと	改善していくこと
選択の重視	レベルに合わせてワークシートを選んでいった。	安易な選択にならないようにする。
余白の活動	授業開始前に着席するようになった。振り返りを具体的に書くようになった。	毎時間の準備に時間がかかりすぎないようにする。
個人目標の設定	主体的に学んでいた。	その時間の授業の目標に合うようにする。
リアルな場面設定	留学生に一生懸命に伝えようとしていた。	毎回リアルな場面を設定するのは大変なので、ALT授業をより活用する。
振り返りの充実とフィードバック	勉強の仕方にも言及する振り返りも出てきた。	多様な学び方を提供できるような授業を作る。

4 2年目の実証的検討

令和2年度は、3年生の2クラスを対象に、年間を通し、以下の3つの手立てを計画し実践した。

(1) 実践した手立て

① Brush up sheet の改善

新潟大学教育学部附属新潟中学校が先行研究として取り組んでいる「プログレスカード」をもとに改良し、その中の「Today's Goal」での個人の目標選択を「毎時間の Today's Goal」に合わせて、コミュニケーションの基本である「話す」、「聞く」のどちらかを生徒が自分で選択するようにする。そして授業の終わりでは自分が選んだ目標に対してA(自信をもってできた)、B(だいたいできた)、C(あまりできなかった)で評価をしている。生徒は自己の目標を選択することで学習に責任をもつようになり、「効果的だった学習方法」を選択することで、自分に合った学習方法を身に付けることができると仮定した。

② 動画の作成と配信

“Learning Beyond the Classroom”の機会を提供するための手段として、YouTube動画を配信することにした。動画はALTが作成するものと筆者が作成するものの2種類を配信した。ALTが配信するものは主に文法項目の新出事項で、生徒は

動画を見ながら新出文法のドリル練習をする。それに対して筆者は、生徒の学習や学校での様子から、必要だと感じた内容を反映するようにして作成した。11月の3回目のアンケートまでにALTが6個、筆者が8個の合計14個をアップした。

③ 辞書引き学習

「辞書引き学習」とは、「辞書で引いた言葉を付箋に書いて、辞書の該当ページに貼っていく学習法。深谷(2018)が愛知県の公立小学校教諭時代に発案し授業で実践した。辞書を引いただけ付箋の数が増えるので成果が実感でき、子供はゲーム感覚で辞書を引く習慣を身につけることができることから、全国的な広まりを見せている。語彙の数を増すだけでなく、子供が自発的に学習する意欲を引き出す効果も期待されている。」(デジタル大辞泉)であり、1990年代から日本国内で広まり始め、2010年ではシンガポールで英英辞典を使った実践も行われた。「自分で辞書を引く」という行動を習慣化することは、自分が学習の担い手になることであり、それが本実践で目指す「自律的な英語学習者」につながるとの考察から取り入れられた。

(2) 検証方法

2つの方法(アンケート、定期考査)を用いた検証が行われた。アンケートは、「英語学習に関するアンケート」と「ALT授業に関するアンケート(楽しみ、発言希望、不安緊張)」の2つを動画提供前の6月、1ヶ月経過後の7月、3回目の定期テストが終わった後の11月の3回、記名式だが生徒には成績評価につながることは一切ない旨を毎回確認した上で実施された。

「英語学習に関するアンケート」は、「英語を学習する理由」と「英語の家庭学習の状況」そして「学校外で英語に触れる機会」の3つの項目から構成された。7月と11月のアンケートでは、筆者が配信した動画の視聴回数と役に立ったかどうか、尋ねられた。

「英語を学習する理由」のアンケートとしては、西村・河村・櫻井(2011)から、自律性の程度を示す動機(理由)によって表現される調整スタイルという下位概念を想定し、外的調整、取入的調整、同一化的調整、内的調整の4つに動機付けを細分化した尺度が用いられた。西村らによれば、実証研究では、自律的な調整スタイルとされる内的調整と同一化的調整は、well-beingや学校適応、学業達成とのポジティブな関連が報告されており、教育的に望ましいものとされている。西村らはこれらの概念を次のように説明している(Table 3)。

<Table 3 調整の整理 (西村 2011 より作成) >

内的調整	興味や楽しさに基づく従来の内発的動機づけに相当し、最も自律性の高い動機づけ
同一化的調整	活動を行う価値を認め自分のものとして受け入れている状態を表す動機づけ
取り入れ的調整	自我拡張や他者比較による自己価値の維持、罪や恥の感覚の回避などに基づく動機づけ。消極的だが活動の価値を部分的に内在化している
外的調整	報酬の獲得や罰の回避、または社会的な規則などの外的要求に基づく動機づけ

本実践でもこれらの2概念の数値が上昇することを旨とした。本実践が「分かる・できる」に向けた授業改善がなされているかの指標として「内的調整」を、また「自律的な学習者」の育成に寄与しているかどうかを検討する指標として、「同一化的調整」について特に着目した。以下のTable 4に質問内容を示した。

<Table 4「英語を学習する理由」の質問項目>

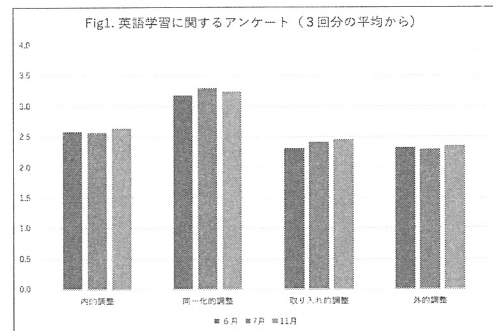
内的調整	1-①	(英語の)問題を解くことがおもしろいから
	1-②	(英語について)むずかしいことに挑戦することが楽しいから
	1-③	(英語を)勉強すること自体がおもしろいから
	1-④	(英語の)新しい文のきまりや、表現を見つげることがおもしろいから
	1-⑤	自分が(英語を)勉強したいと思うから
同一化的調整	2-①	(英語が)将来の成功につながるから
	2-②	(英語について)自分の夢を実現したいから
	2-③	(英語の成績を良くして)自分の希望する高校や大学に進みたいから
	2-④	(英語が)自分のためになるから
	2-⑤	(英語を)勉強することは大切なことだから
取り入れ的調整	3-①	(英語の)勉強で友達に負けたくないから
	3-②	友達より良い(英語の)成績をとりたいから
	3-③	(英語について)まわりの人にかしこいと思われたいから
	3-④	友達に(英語で)バカにされたくないから
	3-⑤	(英語の)勉強ができないとみじめな気持ちになるから
外的調整	4-①	(英語を)やらないとまわりの人がうるさいから
	4-②	まわりの人から、(英語を)やいなさいといわれるから
	4-③	(英語の)成績が下がると怒られるから
	4-④	(英語を)勉強することは、規則のようなものだから
	4-⑤	みんなが(英語を)あたりまえのように勉強しているから

(3) 成果と課題

①「英語学習に関するアンケート」の結果

3回分の「英語学習に関するアンケート」の平均値を<fig.1>に示す。「内的調整」、「同一化的調整」、「取り入れ的調整」、「外的調整」の4項目には大きな変化はなかった。項目別に見ていくと、内的調整と同一化的調整が、外的調整と取り入れ的調整と比較して良い結果だった。この結果が、年間を通してどのような活動にも活発に熱心に取り組んできた2クラスの授業の様子を数値的に表していると考えられる。これまで筆者が感覚的に「授業がしやすいクラス」と感じていた理由が、ここで明らかになった。若手の教員にとって、「勘や経

験」で語られることの多い授業の「上手さ」を、指標を用いることで数値目標とすることができる。



<Fig. 1 英語学習に関するアンケート (3回分の平均から) >

② 動画の視聴回数とアンケート結果の検証

ここでは2つのことが分かった。1つ目は、何が生徒を動画視聴へ導いていたかである。視聴回数の多かった生徒は、内的調整で1-①と1-③で英語学習への「おもしろさ」を感じている生徒だった。しかし、ただ「おもしろさ」を感じているかどうかだけが動画の視聴へ導くわけではない。視聴回数0回の生徒は全体的に低い、特に1-④と1-⑤が低かったので、ここが視聴回数1回の生徒との差、つまり「見るか見ないか」の分かれ目になっていると考える。内的調整は生徒を動画視聴に向かわせるかどうかの大切な指標であり、授業の中で動機づけできるものと考えられる。

2つ目は、「動画の視聴回数が多い＝自律的な学習者に近づいている」と楽観視できないことである。本実践では同一化的調整を「自律的な学習者」を育成しているかどうかの指標として見てきたが、2-②、2-③、2-④、2-⑤では視聴回数が多い生徒ほど平均値が高くなっていった。しかし取り入れ的調整と外的調整では、視聴回数5回以上の生徒が「少しあてはまる」、「とてもあてはまる」と多く回答していた。これはつまり回数が多い生徒は自律的というより、「しなくてはいけない」や「周りからの圧力」で英語を勉強している生徒が多いということである。同じことがALTの授業にも言える。家庭学習に関しても視聴回数が少ない生徒の方が、家庭学習が少なかったが、ALT授業に関しても、「楽しみ」では視聴回数が少ない生徒の数値が低かった。しかしALT授業における発言の希望や不安は、視聴回数が多い生徒ほど高かった。不安だからこそ動画を見ていた可能性もある。よって動画の視聴回数は一つの指標に過ぎず、生徒がどのような動機で動画を視聴しているかをしっかりと分析する必要がある。

③ 動画視聴回数と定期テストについて

9月と11月のテストで成績の変動が大きかった

た生徒について、3回分の英語学習に関するアンケートを分析した。定期テストの成績が上がる時には、どのような動機が関わっているのか何かしらの示唆を得ることができるかもしれないと考えたからである。下位から中低位に上がった生徒が3人、中低位から中位に上がった生徒が2人、中位から上位に上がった生徒は2人だった。英語は「積み上げ教科」と言われているように、既習事項を習得していないとなかなか新出事項が定着しづらいことにあると考察された。

6月、7月のアンケートと比べてプラスの変化があったのは、内的調整の1-③と1-④、同一化的調整の2-①、取り入れ的調整3-⑤、そしてALT授業の「発言」であった。内的調整に関する項目が2つ入っているので、やはり知的好奇心から物事を深く探求しようとする意欲が生まれると、学習が分かるようになりたい、できるようになりたいという意欲が生まれることが分かる。そのような意欲が生まれると家庭学習時間が増加するだろうと筆者は想定していたが、1週間の家庭学習の日数は微増したが学習時間は3回のアンケートの中で11月が一番低かったことは興味深い。知的好奇心をもって学習することで、短い時間でも学力が高まるのだろうかと考える。成績が上がったからなのか、それとも知的好奇心が生まれたからかは不明であるがALT授業の「発言」でもプラスの変化があるので、学習意欲と発言、そしてそれが将来の成功につながると考えてまた学習するという良い循環が生まれていると考察された。

④ 辞書引き学習についてのアンケート結果と生徒の反応

「辞書引き学習」に楽しんで取り組みながら習得単語が増えたと実感し、授業中も自分で辞書を引いて調べる姿が見られる。家庭学習でよく辞書を引く生徒が増えたことは好ましい傾向といえる。分からなければ調べるツールとして辞書が身近になると、家庭学習やALT授業でも不安が減り、自ら学習に取り組む意欲につながると考察された (Table 5 に生徒の感想を示した)。

<Table 5 「辞書引き学習」の振り返り (生徒一部) >

・今までの授業を通して英語のことを前よりも学んで英語に少し興味をもちました。もっと辞典でたくさんの単語などを調べてみたいです。
 ・辞書引きを通して、知らない単語を知ることができた。
 ・辞書引きをし始めてから、たくさんの英単語を知ったり、覚えられたのでうれしいです。友達とクイズを出し合うことでより覚えられと思います。これからもたくさん辞書引き学習をして200単語までいきたいです。
 ・辞書で調べた数が100になった。今までは動詞だけだったから、次は形容詞をがんばりたい。
 ・「like」の使い方を知って英語っていろいろな意味があったことが分かり、英単語の使い方などに少し興味をわきました。

5 今後の展望

2年間の実践を経て、今後はこれらの取り組みを改良しながら継続し、筆者の目指す「自律的な英語学習者の育成」に取り組み続けたい。まず来年度以降は環境面が大きく変わる。動画に関しては、GIGA スクール構想で生徒が一人一台タブレット端末を所有することになるので、今年度のように「家庭学習の補助」としての位置づけから、「家庭学習のメイン」にもってこることも可能になる。動画を見て予習復習をすることを宿題として出すことも可能になる。タブレット端末を用いて合理的配慮をすることもできるようになり、より授業のUDL化も進めることができるようになる。

このように環境が整ったときに生徒がどのように変わるかを、令和2年度と同じ項目でアンケートをとって見ていきたい。そして令和2年度の実践で分かったように「動画の視聴回数」がそのまま「英語学習者としての自律の程度の指標」ではないので、さらに丁寧な分析を継続していくべきであろう。生徒を動画視聴へと導く内的調整と同一化的調整を高めることができるのは、やはり授業改善である。Brush up sheet を用いながら生徒と信頼関係を作り、生徒が自分の将来のために「分かった、楽しい、もっと勉強したい」と感じることができるような授業の実現にむけた具体的な改善の手立てを追求していきたい。

また本実践を通してALT授業が生徒の動機づけや、定期テストの成績に密接な関連があることも示された。ALTが生徒にとって一番身近な「リアルな英語」であるので動機づけには大きく関わると期待されたが、それがテストの点数にまで結びついているとは驚くべき結果である。ALTの配置の関係で各クラス月に数回しかチャンスのないALT授業を、さらに効果的にするためのTTの在り方や授業実践をこれから研究していきたい。

【引用文献】

西村多久磨、河村茂雄、櫻井茂男、2011年、『自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス～内発的な動機づけは学業成績を予測することができるのか?～』教育心理学研究、pp77-87

Rebecca L. Oxford, 2018, "Language Learning Strategies", "In The Cambridge Guide to Learning English as a Second Language", pp.81~90.